震－阪神・淡路大震災記録集　社団法人神戸市医師会　平成7年9月　p313-318

広報部員だより

東灘区　丸　野　博　敏

地震後6ヶ月たった現在、東灘区内の状況は人口の激減による患者数の減少と、区内の大きなマンションなどのビル解体工事の真っ最中であり、毎日コンクリートを破壊する削岩機の音であふれている。JR摂津本山あたりでは、木造の全半壊の家屋のほとんどは撤去され、あたり一面更地になっている。住吉から六甲アイランドへの六甲ライナーは、まだ復旧しておらず、道路は常に渋滞がつづいている。代替バスを待つ人々の顔も、夏の暑さも加わり疲れているようだ。

医師会の行事も、ほぼ元通りに行われるようになってきた。保健所の検診、学術講演会等。しかし被災された会員の診療所の復興は遅い。家の復興は1年がかり、ビルでは2、3年はかかる。まだまだ前途多難である。「春のこない冬はない」との仏法の御金言を胸にじっとこらえている毎日である。

震災後6ヶ月に想う

灘　区　　川　岸　弘　賢

時が経つのは早いもので、震災後6ヶ月が過ぎた今、震災後の医師会の業務日誌(本庄　昭先生、神戸市医師会報No.411、灘区医師会報No.62報告)と灘保健所での経験（灘保健所長　水江日出成先生の原稿)の校正をしていていろいろ想い出される。

あの時、全ての医師の生活環境が変わった中で、医師会と保健所がタイアップして震災後医療に携わり、全力をあげて可能なる範囲の努力と協力をしていたが、震災後数日して大阪のあるボランティア医師グループから　“地震後、灘区のある小学校で診療して来たんだけれど、医師会や保健所はどのように対応しているのか、何もしていないのではないか”と問い詰める電話があった。

現実、医師自身が被災者であり、診療所、自宅の全壊、半壊の状態は、他の地域の医師達には理解できないことである。そのようなことを電話で答えたことがまだ忘れられない。

あのような非常事態では、現地の者でなければ本当に理解できないのではないのだろうか。あの時の心理状態は、体験した者でないと分からないのではないだろうか。

あちこちからのボランティア活動に感謝しながらふと感じた。

中央区　恵　美　裕一郎

壊滅的な被害を被ったにもかかわらず、地震直後より区医師会として見事な活動ができたのは、事務所が倒壊をまぬがれたこと、機器が損壊しなかったこともあるが、自宅兼診療所が全壊したのにもかかわらず、事務所に泊り込み不眠不休の働きをして下さった桑原庶務委員長、これを補佐してくれた樋上事務長、適切な指示を出された進藤会長、ねばり強く各種交渉、対応に当たられた小柴副会長、西田救急委員長らに依るところ大であったが、いち早く多くの会員が積極

的に区内全避難所へ訪問、神戸市医師会夜間急病診療に、休日診療所への出務、テレフォンセンターへの出務などに参加されたことによるものであった。保健所など行政および上級医師会との連絡、それらの情報を一般会員へ伝えるに当たって大きな力となったのは「医療情報委員会」が2年前設置していた全会員へのFAX設置に依るところ大であった。

一方、区内21病院の診療及び入院状況もいち早く会員、保健所に報告することができたのも、病診連携委員会が積極的に病診、病病連携を推進していたことによるものであった。

まるでこの震災を見据えていたような各種事業であり、執行部先生方の見識に敬意を表したい。

又当初2千人から数十人まで大小85ヶ所もあった区内避難所を手分けして毎日一回訪問し、各地から来られた救護班の方々、保健所と連携をとりながら、徐々に地元の医療を地元の医師で行おうと、昼夜なく頑張って下さった会員諸先生方に心より御礼申し上げたい。

兵庫区　松　田　俊　雄

世間ではいろんな不幸な出来事が日々、起こっていますが、そのようなことは、小市民として常識的な生活をしているかぎりは、まず自分の身には振りかかってはこないだろうと思っていました。これが私たちが平静に生活していく拠り所でありました。この、生活の原点ともいえる思いが覆されても、やはり、それを拠り所にせざるを得ません。そして、いささか情緒不安定となりがちです。

震災から6ヵ月が過ぎました。街の風景は様変わりをしています。これは復興へのプロセスなのでしょうが、復興とは、広い道路と緑の公園に彩られた都市を造ることなのでしょうか。不揃いな町並みではあっても、人々が住み、商売をする町の賑わいを取り戻すことではなかったのでしょうか。今、巷で語られている復興への都市計画は、震災にあった人達の生活を踏み台にして飛躍しようとしているところがあるように思えます。

今年は震災、豪雨に耐えてきたためでしょうか、この夏の暑さにも受け身で、無理をせずに秋風を待とうという気分になっています。

大震災半年後

北区　伊　田　幸　子

7年7月25日(火)

本日気温33度、梅雨明け猛暑、体は未だ暑さに慣れず。球児の熱闘最高潮。天神祭華麗。

景気低迷、参院選連立与党は厳しい審判を受け敗北。来月上旬には内閣改造。

テント村は室温50度。防暑シートを懸けると、10度以上は下がるという。

銀色に輝く防暑シートを懸けて猛暑を凌ぐ。

未だ時々余震あり。神戸市より土砂災害、がけ崩れ、地すべり、山地災害危険箇所地図の配付あり。大雨・長雨に注意、早めに避難せよという。

六甲山系はずたずた。大震災の危険は未だ終わらず。ふと見上げれば、我が家は地すべり、がけ崩れ危険箇所の真下。本年の台風、難なく過ぎる事を祈るばかりである。

新聞では、復興、復興と毎日書かれているが、現状は復旧にまだまだ時間がかかり、遅々として進まず。倒壊家屋取壊し後の空き地のあまりの広さに、今更ながら被害の大きさが身にしみる。

市内の避難所は現在なお281ヵ所あり、1万6千人余りが暮らしているが、食事配給打切が7月末から8月20日に延期。仮設住宅建設の遅れの為。

大震災から半年、他府県ではそろそろ記憶も薄れているだろうが、復興は並大抵ではない。現状はまだまだ難問山積み悲惨である。

破壊から復興迄の3ヶ月

長田区　高　橋　章　三

今回の大震災に関しては、多数の先生方が種々の立場からいろんな文章を書いておられますので、私は写真を主として、“ドキュメンタリー”風に説明致したいと存じます。

今はもう見ることも無い過ぎし日の我が診療所の正面です。一階の奥が入口になっております。元々ガレージとして使用していた場所ですが表通りこ面したところなので、勿体ないと思い、改造してガレージ2階に診察室を持ってきました。ご覧のように1階はガレージで柱で支えているだけの空洞です。典型的下駄ばき建築です。結果的にはこれが命とりになってしまった訳です。

　震災後3日間、東灘の自宅で足止め状態になり、ラジオ以外何の情報も入って来なくて、陸の孤島に閉じ込められたまま長田区と交信する方法も無くイライラしていたところ、息子が六甲山経由で長田へ行ける道を見つけてくれ、片道4時間もかかってやっと診療所にたどりつき見たのがこの光景でした。人間というのは変な生物で、普段は言葉で物を考えるのに、咄嗟の場合、感嘆符しか出てこないのですネ。“ウワァー!”という事しか浮かんで来なくて、次に来る単語が何も出てこない。何分間かは頭の中が真白になった感じで、息子が “お父さんガンバッて建て直そうョ”と言ってくれる迄殆どボーッとしていました。それからやっと頭が回転を始め、とにかく歩道の中央迄突出したこの危険物を一刻も早く解体撤去しなければ第三者に迷惑がかかると判断し（事実オパアチャンが三人倒れたビルの下に入って “寒いからここで休ましてもらいまっさ…“とか言うのです。そのまま又建物が崩れたら即、あの世行きです)直ちに日頃取引している工務店に頼んで大阪から工事人夫を集めて解体をしてもらう手続きを取りました。（なお、念のため附加しますが、この時点で行政はまだ何の手もうってはなかったので全部個人負担でやるつもりでした。官僚主義的行政のやり方については言いたい事が今日に到る迄山ほどありますが、それは又機会があれば書かせて頂きます)

　解体が始まり、第一槌が打たれた瞬間です。あのカニのハサミのような機械で永年使い慣れた建物が壊れていくのを見ているのは辛かったし思わず涙が出そうになりましたが、安っぽい感傷にふけっている時では無いワと解体撤去後の対策を考えておりました。

　解体直後の写真です。元々鉄筋コンクリート3階建に増築という形でガレージを改造して建増したものですので、本館がどの位傷んでいるか気になっていたのですが、幸いなことにこれが一部損傷程度で残っていました。殆ど奇跡です。正面の建物がそれです。

　取り壊した診療所のガレキの山です。これを捨てに行くのに又大変時間がかかったことは皆様御存知の事と思います。

　さて辛うじて残った本館。ここに検査室、待合室、看護婦休憩室etc.があります。とにかくそれらを皆一応ぶち抜いてしまい、 ワンルームにしてから改めてそこに耳鼻科診療所作成する決心を定め、後は工務店の社長と現場で口答で相談しながら（従って設計図も見積もりも無し！！)作っていくという、一寸常識では考えられない工事法で再開院に向かって走りはじめました。幸いな事に社長が何度も東灘の自宅の増改築をやってくれていて、私の好みとか感性を非常によく解ってくれている人なので、ツーカーで通じるものがあり、あの人手の無い時期に最優先で私の処へ職人さんを廻してくれたお蔭で、解体着手後わずか2ヶ月と少々で診療所が再開できるようになりました。

完成した新診療所です。屋内は写真では解りませんが、以前より使い易くなりました。費用も結構かかりましたが、老後に遊んで暮らすのを少々延ばして働けば何とかなるでしょう。

実際には、ここまで持ってくるのには最短で4ヶ月はかかると言われていたのが、2ヶ月と少々で完成した事を御協力下さった方に深く感謝しています。殆ど戦争のような毎日でしたが、医師としての使命感みたいなものが生まれて初めて実感として心にわき上って来て、毎日工事現場に行く度に必ず5～6名の患者さんが立っていて “先生いつから再開すんの?待っとるからはよしてヤ”とか言われると、この人達の為に自分が一日でも早く復帰する事が一番地域医療に役立つ事ではなかろうかと自分に言い聞かせ、往復6時間の道をガンバリ通したんだと思います。

4月10日、それは診療所の再開の日であると共に自分の第二の誕生日です。

最後に紙上を借りてお礼を申し上げます。力づけてくれた同業の先生方、安否を気遣ってくれた友人達、テンション上りっぱなしの私を支えてくれた家族、商売気抜きで一生懸命やってくれた工務店社長、……皆さん有難とう。もう暫く現役でがんばりますから見守っていて下さい。本当にアリガトウ！！

「あの日」から半年を経て

須磨区　石　川　　哲　三

須磨区は地勢的に「北須磨地区」と「南須磨地区」に分けられます。新興ベッドタウンの「北」、旧市街地域の「南」。今回の震災は、まさにその被害の程度でも「北」と「南」を判然と分けてしまいました。「南」の住民は震災の被害に打ちひしがれ、一方「北」の住民は被害の少なさ由に後めたい気分におそわれました。須磨区医師会は今回の震災に際して、「北」と「南」を乗り越えて一致団結、ことに当たったことを特筆しておかねばなりません。震災直後の医療的救護活動は勿論のことです。半年経った今、区医師会は全員の総意で、全焼、全壊の診療所に対する復興支援を行う規定を作りあげました。

私個人のことを述べます。「あの日」から半年、状況は必ずしも改善には至っていません。「あの日」見たこと、それからのいく日かの間に体験したこと、これらのことは当時は、一生忘れられないことだと思っていました。ところが最近、職員たちと話をしていて、当時の記憶があやふやであったり、脱落している部分があることに気付きました。私の心の傷は少しずつ「回復過程」にはいっているのです。

私たちはやがて、1月17日に「あの日」を思い起こし、その他の日はそっと心の奥のひだの中に

かくしておくことができるようになるでしょう。「8月15日」と同じように。その時が「回復過程」の終結した日なのです。

阪神大震災から6ヶ月

西区　　熊　谷　利　幸

悪夢のような大震災から半年が経ちました。当初寸断されていた交通機関も徐々に回復し、人々の表情にも少し落ち着きが感じられますが、被災地に行く度に空地が増え、地下鉄に乗っていても以前のような華やかさがなく、神戸の街も随分と変わったなという感じです。やはり、本格的な復興には10年位かるのでしょうか。

西区においては現在7,000戸の仮設住宅が設置されています。1人暮らし老人等の要援護世帯をはじめ、入居者の方々に対し適切な保健、医療、福祉サービスを提供するため、3ヶ所の仮設診療所の設置、キャンピングカーや集会所での出張総合健康相談(年60回)、1人暮らし老人等の安否確認のためテレホンサポート事業などが実施されています。

これらの事業が円滑に推進されるため、西区医師会と西保健所は業務連絡会をもって定期的に意見交換を行っています。

被害の少なかった西神ニュータウンなどの新市街地が復興の足がかりとなり、再び活気あふれる神戸のよみがえることを期待しています。

垂水区　小　野　辰　久

編集にあたって皆さんの原稿を読んでいると、皆が皆、今に到るもあの一瞬が頭にこびりついて、忘れようにも忘れられない様子がよくわかります。

そしてその時の茫然自失の様が、その後の苦悩と悪戦苦闘の様が、ひしひしと伝わって来ます。

その怖さと苦しみは想像を絶するもので、同じ被災地であっても比較的被害の少なかった地域のわたくしたちにさえ、とても全部理解できるものではないようです。

ましてや、震災後「あの時、こうすべきであった」とか「何故ああしなかったか」など、色々の人達がさかしらに言われていますが、被災者でない人達に「解ってくれ」と言ってもとても解ってもらえないのは仕方がないことなのでしょう。

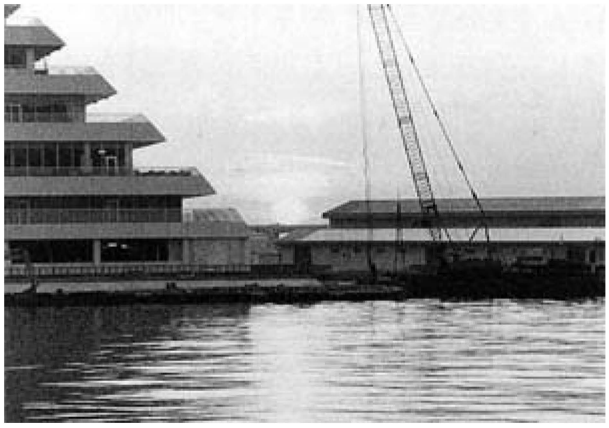
実際に被災地の真中で何が出来たでしょう、皆それぞれにその立場立場で最善を尽くされたことこそ、特筆されてしかるべきだと思います。

震災後半年余たちました。幸い日常の診療は大分落ち着いてきました。

これからは、2次的に生じる問題、例えば老人や子供の心の問題などを含めて、災害医療の全体像をまとめてデーターとして残すことが、次の（こんなことが度々起っては困るのですが…)災害への対応を考えるために、われわれ医療に携わる者への課せられた大きな問題である筈です。

被災された皆様も、もう一度気力を奮い起され、それぞれの専門の立場で一致協力して、真剣に取り組んで行くことが大切だと感じました。

ガンバロー神戸！！



(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

今回の震災で御支援下さった方々

（敬称略・順不同）

西脇市多可郡医師会会長　千頭　隆
鹿児島市医師会会長　松岡　克己
参議院議員　大浜　方栄
札幌市医師会会長　樋口　忠
仙台市医師会会長　千田　典男
北九州市小倉医師会会長　野正　睦
東京都医師会会長　福井　光寿
東京都練馬区医師会会長　丸茂　裕和
名古屋市医師会会長　福田　浩三
大分県医師会会長　吉川　暉
大分県医師会副会長　杉田　肇
横浜市医師会会長　手束　和之
千葉市医師会会長　藤森　宗徳
参議院議員　宮崎　秀樹
フクダ電子㈱代表取締役会長　福田　孝
フクダ電子㈱代表取締役社長　福田孝太郎
苫小牧市医師会会長　野中　富夫
前橋市医師会会長　八木　秀明
大阪府阿倍野区医師会
北海道医師会会長　吉田　信
愛媛県松山市医師会
岐阜県大垣市医師会
長崎県島原市医師会、南高来郡医師会
徳島県徳島市医師会
神奈川県横浜市医師会
神奈川県横浜市医師会職員一同
宮城県仙台市医師会
神奈川県川崎市医師会
安田火災海上保険㈱取締役兵庫本部長　吉岡　哲
千葉県千葉市医師会
大阪府医師会
日本医師会
愛知県名古屋市医師会
北海道札幌市医師会
長崎県長崎市医師会
長崎県長崎市医師会婦人部会
群馬県前橋市医師会
東京都医師会
広島県広島市医師会
四国メディカルトリートメントセンター
北九州市医師会
東京都昭島市医師会
埼玉県深谷市大里郡医師会
千葉県松戸市医師会
神奈川県鎌倉市医師会
北海道函館市医師会
福岡県福岡市医師会
広島県広島市医師会婦人部会
北九州市小倉医師会
大阪血清微生物研究所
埼玉県大宮市医師会
安田火災海上保険株式会社
兵庫県予防医学協会
埼玉県医師会
北区医師会
京都府医師会
神戸医師協同組合
神奈川県小田原市医師会
福岡県福岡市医師会杏花会本部
垂水区荻野美恵子会員
富山県魚津市内科医会
山形県東根市医師会
長野県長野市医師会医青会
東京都立大学教授　望月　利男

改めて厚く御礼申し上げます

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

編　集　後　記

あれから半年がすぎました。
まるで昨日のように思う反面、時にはずっとずっと昔のような気もします。
此度の災害は50年前の戦災と同じ位、考えようによってはより以上の被害だということです。なにしろ予告なしのことですから。
戦災から50年、その時にたてられた復興計画の殆どがこの50年間に遂行されてきていたのに、亦、振り出しへ戻ることになったのです。今度も戦災後のように、時の有識者が集まっているいると計画をたてて下さるのでしょう。それが雲の上のことであって、下々にはなかなか理解できないことがあっては困るのですが…。
声の大きい人、喋っているうちにご自分の言葉に酔い、ご自分のいうことがすべて正義であって、すべて正しいと思われると、下々はどうなるのかと…。
これが杞憂ならいいのですが。
でも、私共、下にいるものには“稷下の学士”より“北門の学士”が望まれるのです。
すべての計画が実施された場合、その成果は50年先否、100年先に評価されることでしょう。

本誌はのべ130名にのぼる方々に筆をとっていただき完成しました。
ここでご協力下さった皆様に厚く御礼申し上げます。
まだ、もえている時、もえつき、つかれ果てた時、少しはひややかな目で物事を見るようになった時、それぞれの時期に、それぞれの方が身をもって体験された事共を文にして下さいました。
これは大切な記録だと思います。青史ではなくとも何年かたって河清をまち、今回の災害を記録する時に参考になるものだと思っています。
阪神・淡路大震災を「編修」する場合、貴重な資料として後の世の人が用いてくださると信じています。
此度の災害でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、災害にあわれた方々に心からお見舞いを申し上げます。
亦、諸々方々から私共に、物心両面から御支援下さった皆様に厚く御礼申し上げます。
震災後しばらくしてバスが動きはじめた頃、いつもの顔ぶれが見当たらず、ハテどうなさったかと思っていた人々が次々にそろわれ、少しは春が近づいたのかとうれしく思い、信号が青になると発進することができるようになった車の列に、ささやかな希望を見出した。
小さい、小さい春。
いつの日か、以前の姿にもどり、より以上に、心あたたかい人々が集う神戸の街、ぬくもりのある街・神戸になる日を楽しみに…。

神戸市医師会広報部担当理事　鷲　尾　　隆

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）